人と人とを繋ぐもの——蔵田周忠と森銑三

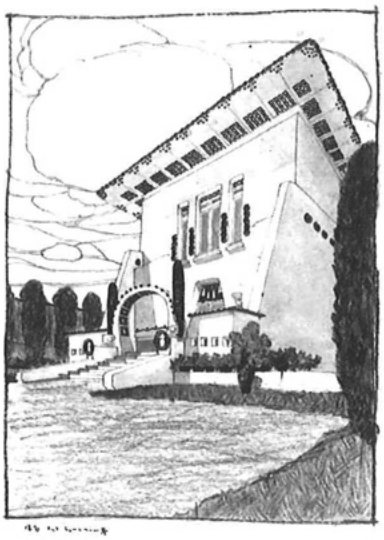
森　仁史

人々の過去の営みを詮索する我らはどうしても彼らの系譜や領域に——例えば美術や建築や音楽などと——従って足跡をたどろうとする。しかし、自らの日々の暮らしや交わりのあり様を振り返れば、決してそのように整理された筋道に従ってなどいないことは直ぐ分かる。むしろ、人と人との近しさや密度は互いを結びつける感覚や思惟のたたずまいによると言うべきだろう。

蔵田周忠（ちかただ）は学歴としては大正二年（一九一三）九月工手学校建築科を終えたのみであり、それも給仕をして月謝免除を受けてのことだった。修了の翌三年三月から三橋四郎建築事務所製図員、四年十月からは曾根・中條建築事務所に勤務し、高松政雄に薫陶を得てやがて建築設計に才を開かせた。ここで言う製図員とはトレーシング・ボーイのことであり、蔵田より少し前明治四十年（一九〇七）二月に工手学校を卒業した竹田米吉は「トレースとは、他人の描いた図面に紙をあてて写すだけのことである。製図としては徒弟のやる仕事だ。…学校を出てからもトレースばかりで、いつまでこんなことをやらされるのか少々辟易して嘆息もした。」（『職人』工作社、昭和三十四年）ようだ。蔵田は竹田と違ってきっと図面が美しかったのだろう。それは残されたドローイング〔図1〕からもじゅうぶん伺え、このゆえに先輩、同輩から注目されたと思えるほどに達者な腕前である。また、外国語文献にも通じていたので、大正九年（一九二〇）から『建築評論』の編集に携わり文筆でも頭角を顕した。さらに、翌十年分離派建築会に迎えられ第二回展から出品し始め、次第に斯界の注目を集める存在となっていく。

この工手学校は現在は工学院大学となっているのであるが、戦前には小学校を卒業しただけの生徒や現場の大工、土工たちが西洋技術の基礎を学ぶ場であった。この学校は東京帝大総長渡邉洪基の発案によって明治二十年十月三十一日に民間教育機関として創立され、土木、機械、電工、造家、造船、採鉱、冶金、製造舎密学科が設けられ、翌年二月六日に木挽町の東京商工徒弟講習所に間借りして開学した。前記の竹田は昼間は大工として働き、仕事を終えて半纏姿で学校に通った。実務的には設計者である帝大卒の学士様の手足となって現場を采配し、場合によっては図面のコピーマシンとなるべき人材であった。従って、速習教育によって基礎知識を身に着けさせることを基本とし、各学科とも修了年限は一年半で、五ヵ月を予科（昼・夜間）とし残りが本科（夜間）であった。創設時の予科五か月のカリキュラムは次のようなもので、毎日六時間以上の授業となり絵に描いたような詰め込み教育であった。〔図2〕そのうえ厳正な進級試験が課されたので、定員は百五十名であっても、一期で半数に減るほどであったようだ。

算術（加除乗除）	五時間
代数（一元二次）	五〃
幾何（平面要略、求積）	五〃
三角術（八線、対数用法）	五〃
製図（用機画）	五〃



1　蔵田周忠《独逸田舎の別邸》
（『建築』第190号、1920年）

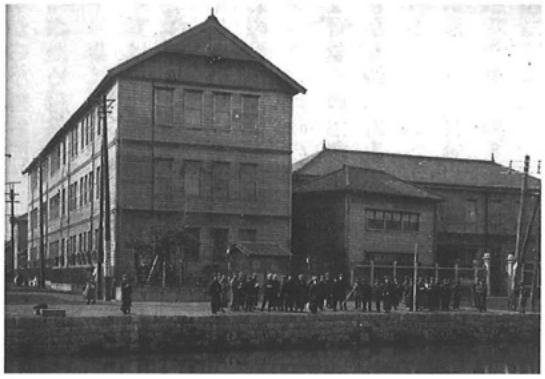
羅馬字（綴字）　三〃
理学（初歩）　二〃
化学（初歩）　二〃　計　三十二時間／一週

同校は明治二十年九月八日には旧築地病院建物に移転した。竹田の回想によれば、当時「全く築地は寂しいところであつた。雨が降つても雪が降つても徒歩通学、外套などの贅沢な物を着ている者もごく少なく、和服に袴、下駄ばきで、電車にのる人も少ない。」有様だった。明治二十九年に校舎を新築したが〔図3〕、関東大震災で焼失してしまい、淀橋に移転するに際し、校舎設計を懸賞公募し二等を得た卒業生千種薫案をもとに鉄筋コンクリート造三階建ての建物が昭和三年四月二十日竣工した。同年六月工学院と改称し、高等科一年が付け加えられた。この学校については工学院大学百年史を編纂した茅原健のいささか愛情過多な『工手学校』（中公新書ラクレ）がついさいきん公にされている。

蔵田は大正十年（一九二一）に宮原富美子と結婚し渋谷に住まったが、富美子の母はよね（嘉永五年―昭和十四年）といい、その没後に『宮原よね遺詠』（孔版、私家版）と題された歌集があることを知った。これによれば、よねは鹿児島加冶屋町出身で、明治十九年夫に従い青森へ、次いで二十二年北海道に渡り、四十三年札幌でジョン・バチェラーから受洗し、最期までキリスト者として信仰固かったとのことである。蔵田が昭和元年（一九二六）に聖シオン教会〔図4〕を設計しているのはよねがこの教会信徒だったからのようだ。この教会は戦後建て替えられたが、蔵田がデザインしたステンドグラスは今に伝えられ、森谷延雄に設計を依頼した家具は今も信徒に受け継がれている。蔵田はこの頃宮原一家と渋谷村に同居していたものと思われ、教会建設の文章ではともに信者であったとされている。少なくともよねの歌集に掲載されている蔵田の短歌は同じ信仰をもつもののように感じられるのだが、蔵田はキリスト者としては葬られてはいないので、この時期に限られたことなのかもしれない。

宮原家の長男知久は晃一郎（明治十五年―昭和二十年）のペンネームで活動した児童文学者であり、今日「我はうみの子」としてよく知られる文部省唱歌の作詞者である。（以下宮原典子編「宮原晃一郎年譜」『日本児童文学館大系』第一一巻　ほるぷ出版　昭和五十三年所収による）彼も明治三十五年に北海道で受洗している。勉学を志したが病弱のため果

2　工手学校機械製図室（明治末）『築　工学院大学学園創立百周年記念写真集』1987年より



3　工手学校校舎（築地）同上書より

4　蔵田周忠《聖シオン教会》1926年

以下『蔵田周忠　生誕百年記念：先生の建築史上の足跡と子弟たち』1997年より

たせず、また三十七年に父が死亡したため翌年から小樽新聞社記者となり家計を支えた。四十年頃より外国文学研究のため語学独習に熱中する。この頃、文部省の新体詩懸賞募集（四十一年）に応募した「海の子」が佳作当選となった。この作詞については、佳作当選（賞金十五円）通知と著作権譲渡の書状が遺族に残されていたため、例外的に作詞者が特定できている。その後、大正五年母を伴い上京し、ロシア語通訳を努める傍ら創作活動に従事した。この歌は宮原が故郷の錦江湾を偲んで作曲したのだが、七番まで歌詞があり、当時の文部省歌がたいていそうであるようにきわめて現実的な野望や政治的意図を率直にうたいあげており、七番の歌詞は次のようなものである。

いで大船を乗出して
我は拾はん海の富
いで軍艦に乗組みて
我は護らん海の国

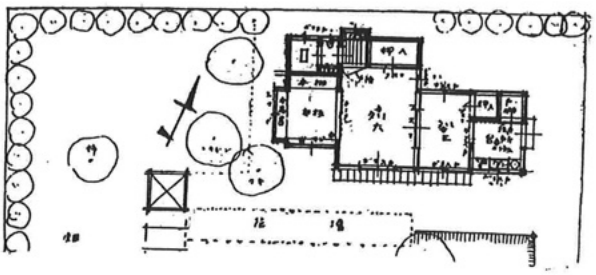
近世文芸研究に比類のない足跡をのこした森銑三も小学校を卒業して直ぐに明治四十三年（一九一〇）九月工手学校に入学した。ただ、翌年予科修了後に脚気のため就学を中断し故郷の刈谷に帰えらざるをえなくなった。この短い在学期間の間に同じクラスの文学好きなグループのなかで知り合い、肝胆相照らす仲となったのが蔵田であった。森銑三、蔵田周忠とも十六歳の出会いであった。森と蔵田はただ若い時期に知り合い、同じく文学趣味を共有しただけでなく、その後さらに具体的な行き来があった。

蔵田はそのキャリアのごく初期から自己の建築を殆ど住宅に限っていた。それは彼の建築への関心のあり方が人々の日常と直接触れ合う、あるいは日常生活を形づくっていくものに傾いていたからのように思われる。蔵田が建築と同時に一貫してインテリアデザインに関わり続けたことを考えれば、納得できることだ。これには彼が学んだ第一次大戦後のドイツ建築の趨勢が影響を及ぼしているのだろう。住宅の機能とそれを実現する家具デザインにおいて、坂倉順三や堀口捨己など同時期の実践もあるのだが、蔵田の達成したものは他の追随を許さない水準にあるように思う。

森銑三からすると、蔵田との長きにわたる交友は単に昔懐かしい学友というだけでなく、謡曲、連句、中国古典など建築とは直接には関わらない分野での共通項があったようだ。確かに、ずっと後年だが蔵田の《古仁所邸》〔図7〕には蔵田の選択によって泰山経石硲拓本が壁紙として使用されている。これらの背景はあれほど文筆活動が多かったにもかかわらず、蔵田自身によっては全く語られていない。他方、森銑三は二人の往来について幾度も述懐している。この対照は森にとって自己形成の主要な核が芽生えた時期だったからなのだろうか。つまり、文芸の魅力と奥行きを知ろうという年代。この十六歳に自覚した感覚が蘇る時期に二人は再びめぐり合う。

森銑三が東大史料編纂所に勤務し始めた大正十五年（一九二六）、つまり三十一歳のとき、蔵田の設計による住宅に隣り合って住まうことになったのだ。蔵田の経歴のなかで、最初期に属する《供養塚の自邸》（一九二六）〔図

5　蔵田周忠《供養塚自邸》1926年



6　蔵田周忠《宮原邸》1926年

5〕は木造平屋建ての少々表現主義的な住宅である。この当時の彼の設計した平和博覧会音楽堂や第二回分離派建築会出品作にもこうした傾向はよく表れている。この自邸は駒沢村供養塚に千二百坪の敷地を借りて、短冊形に三等分し、大竹博吉邸を四百坪、蔵田・宮原晃一郎邸〔図6〕を二百坪の敷地に、いずれも蔵田設計によって三棟の住宅を建てたうちの一棟なのである。残る二百坪に少し遅れて森邸がやはり蔵田設計で建てられたのだった。蔵田自邸は駆け出しの建築家らしく十三・五坪というつつましい建物だったが、宮原邸は九坪、森邸は二坪半と全く最小限の居住空間で、森邸は一月余りで建ったという。しかし、「人通りの殆どない新開の道路を隔てて麦畑があり、小川があり、遙かに雑木林がある。」なかで、「私は端居して、満天の星の美しさをしみじみ味わった」し、「雪をいただいた富士山が西の窓からよく見た。」敷地に蔵田の書生が芒を植えてくれたので、この家を森は星芒書屋と名づけて愛した。

森は蔵田を通じて外国文学に堪能な宮原を敬愛していた。森は三月二十日過ぎに引越し、ここから玉川電車、市電を乗り継ぎ二時間かけて本郷に通った。日曜は三度とも蔵田家で食事するほどの間柄であった。宮原、蔵田、森の三人は志を同じくしていたと見え、昭和二年（一九二七）築地小劇場での千田是也洋行送別記念公演に蔵田の発案で揃いのルパシカを着て出かけ、「供養塚の三人男」を自称したという。蔵田が渋谷から住まいを移したり、森が遠きをいとわず暮したのには彼らが共同して暮す楽しさゆえなのだろう。国木田独歩が武蔵野を外からの散歩者として発見して二十年がたち、その自然のさなかに住まうことで自らの生を確かめようとした彼ら、少年期の夢を基にようやく多少の自信を込めて世に漕ぎ出そうとしていた若者たちのユートピアだったのではないだろうか。大竹はロシア語文献輸入書店ナウカの創設者で、三人組のルバシカと関係がありそうだが、大竹と蔵田の関係は調べがついていない。しかし、やがて宮原は結婚して鎌倉に移り、蔵田は渋谷の前記の住まいで仕事することが多くなり、森も勤務以外に執筆、調査依頼が増え続け、二年ほどして本郷に別に下宿を構えることになり、彼らは供養塚から次第に離れることになった。

7　蔵田周忠《古仁所邸》居間　1936年

この頃、森銑三が宿直明けの月曜日に放送番組に出演すると、編纂所事務官に勤務中の出演を咎められた。森が宿明けと呼ばれる代休日であったと反論すると、役所は雇用者に休日には休むように求めているのだから、出演はいずれにしてもけしからんと言い渡される。この一件はよほど腹にすえかねたのか森は『思い出すことども』（中央公論社、昭和五十年）などで、再三言及しているが、まったく同じ論法をつい数年前筆者も市役所から申し渡されたことがある。七十年前の逸話は昔話ではなくいまなお官僚制度に生き続ける論理であり、この根強さは日本社会の健全さなのか宿弊なのか読んでいて身につまされる思いがした。

人々の思いや志は活動しているさなかには生き生きと輝き、昂揚とひたむきさがあふれるのだが、当事者の沈黙や時の移ろいがこれら総てを押し流す力を持っていることは我らの短い体験でも知られるところである。これを超えるものが官の論理であるとすれば、やや侘しい世を我らは送ろうとしているように思えてならない。ならばせめて、寡黙な蔵田に代わって、言葉を尽くした森の記述を受けとめておきたい。

一寸

第四十号　二〇〇九年十一月

第四十号目次

新・旧刊案内40　青木　茂　1
土方さんの翻訳書・その他
「本邦挿画家大番付」　岩切信一郎　7
（昭和十三年・井上弥太郎作）
行方不明後の《藤牧版画》の足跡（10）　大谷　芳久　12
―藤牧版画の後摺りについて17
近代日本画の構図決定格子（六）　金子　一夫　28
―大観・美術学校卒業後「流燈」まで―
床の間のロートレアモン　丹尾　安典　34
薔薇楼蔵梓の顛末　銅・石版画遺聞35　森　登　38
『鵞瑯皤児回島記』と『造化機論』
人と人とを繋ぐもの―蔵田周忠と森銑三　森　仁史　44
■装幀本談義
恩地孝四郎装『烟れる田園』・小村雪岱『月光集』　山田　俊幸　48
『一寸』総目次　第1号～第40号　52
「一寸版画」（藤宮　史　作、木版）

新・旧刊案内40
土方さんの翻訳書・その他

青木　茂

■土方定一には本誌先号に挙げた三冊以外に次の翻訳本がある（戦前のみ）。

(1)フランツ・メーリング『レッシング伝説　第一部　独逸専制主義と古典文学の歴史と批判』土方定一・麻生種衛訳、昭和七年三月二十五日、木星社書院（福田久道）、四六判、三七二ページ

(2)エルンスト・ロバート・クルチュウス『仏蘭西文学』土方定一訳、昭和十年十月二十九日、楽浪書院（篠田太郎）、四六判、三〇四ページ

(3)トオマス・マン『文学論』土方定一訳、昭和十一年一月二十一日、サイレン社、四六判、二九八ページ、装幀（「装幀は私達の愛する海老原喜之助氏にお願ひした」）

(4)カール・フローレンツ『日本文学史』土方定一・篠田太郎訳、昭和十一年六月十日、楽浪書院、四六判、三八〇ページ

(5)フランツ・メーリンク『ハイネと青年独逸派』土方定一・朝広正利訳、昭和十一年七月二十二日、西東書林、四六判、三〇七ページ

(6)エルンスト・ディーツ『印度芸術』土方定一訳、昭和十八年四月三十日（二千部）、アトリエ社、B5判、三〇三ページ、原色版六葉、挿図二七七図

僕の手許にあるのは以上の六冊、先号のを加えて九冊であるが、探せばまだ二、三冊はあろうかと思われる、遭遇したいものである。例えば(2)の跋文にクルチュウスの「ブリュヌティエル」（一九一四）は「坂崎登氏と共訳しつつあるので、遠からず出版の運びとなると思ふ」とあり、僕のノートにはハウスホーファーの何やらという本を坂本徳松と共訳している